

# 高校生を対象とした当事者参加型体験プログラム 「がん治療について一緒に学ぼう！」の実施と評価

高岸弘美<sup>1)</sup> 村松照美<sup>2)</sup> 文珠紀久野<sup>3)</sup> 名取初美<sup>2)</sup>  
茂手木明美<sup>2)</sup> 小尾栄子<sup>2)</sup> 山北満哉<sup>2)</sup> 立石ゆか<sup>2)</sup>

## 要 旨

科学研究費補助金に基づく独立行政法人日本学術振興会の助成を得て、高校生を対象とした当事者参加型体験プログラム「がん治療について一緒に学ぼう！」を実施、プログラムの評価を行う目的で参加者へ質問紙調査を実施した。参加者は56名であり、54名から回答を得た。結果から、内容について「期待した内容とほぼ合っていた」「期待以上であった」が9割以上であった。また、満足度については全員が「とても満足」または「やや満足」と答えていた。自由回答結果から、参加したことによって、がん治療やがん看護に対する知識や興味が深まっていたことが分かった。参加したことで、高等学校学習指導要領における、「健康の保持増進」「生涯を通じる健康」「社会生活と健康」に関する学習を深めることが期待され、自己の健康を保持・増進させるための知識を得たり、興味関心も深める効果として期待できると考える。

キーワード：ひらめき☆ときめきサイエンス がん看護 高校生 科学研究費補助金

## I. はじめに

ひらめき☆ときめきサイエンス<sup>1)</sup>は、独立行政法人日本学術振興会（以下、学振とする）と国公立大学および大学共同利用機関が実施する事業で平成17年度から、大学を含む諸研究機関の研究室で行われている研究の内容・成果を広く一般の小中学生や高校生を対象に、わかりやすく伝える機会を提供するものである。筆者らは平成22年度に初めて本事業を実施した<sup>2)</sup>。その結果や改善点も踏まえて、本年度は「がん治療について一緒に学ぼう！～副作用って何だろう？～」というプログラムで立案、採択され2回目の実施となった。

平成23年度は、111機関で204のプログラムが実施された。実験系・医学系のプログラムが大半を占める中、看護系のプログラムについては「養護教諭」「感染予防」という内容と本プログラムのみであった。

## II. 目 的

プログラムの実施状況や参加者へのアンケート結果から高校生に対する本プログラムの効果を昨年度の結果と比較の上、評価をし、今後のプログラムの在り方を検討する際の一助とする。

## III. 方 法

### 1. 研究デザイン

調査研究

### 2. 研究方法

本質問紙調査は学振からのプログラムの実施規定により指定があり、実施した。質問紙は無記名とし、以下の2つの内容から構成した。1つ目は、学振作成の指定された書式の質問紙であり、2つ目は各大学で自由に追加できる内容の質問紙である。本プログラムの終了時に、参加者に記載してもらい、記入後は出口に設置し

（所 属）

- 1) 山梨県立大学看護学部 成人看護学領域
- 2) 山梨県立大学看護学部 広報委員会
- 3) 山梨県立大学看護学部 入試委員会

た回収箱で回収した。配布時に、記入は自由意思に基づくこと、匿名性は確保されることを口頭で説明した。

### 3. 調査項目

学振が作成した質問紙の内容は、基本属性、学年、参加して面白かったか、プログラムはわかりやすかったか、科学に興味をわいたか、将来自分が研究者になろうと思ったか、参加理由、また参加したいか、参加しやすい時期、プログラムは誰から知ったか、科研費について知っていたか、という内容であった。

筆者らが作成した質問紙の内容は、本学への来学回数、入学を希望しているか、オープンキャンパスへ参加したことがあるか、がんに関する話をこれまでに受けたことがあったか、看護師の役割について理解を深める機会になったか、参加して以前よりも看護への関心は深まったか、期待した内容だったか、満足できたか、本学で学んでみたいという気持ちは強まったか、参加して印象的だったことは何か、参加してよかったことは何か、本企画やオープンキャンパスに望むことは何か、であった。

回答は選択肢と自由記載で構成した。

### 4. 分析方法

調査項目ごとに記述統計を算出した。自由記載については内容について回答数を集計し、記載した。

### 5. 倫理的配慮

調査の実施に際しては、口頭と文書で調査の目的・意義について説明し、回答者個人が特定されないこと、得られたデータは調査目的以外では使用しないこと、参加は自由であることを説明した。また、質問紙の提出をもって調査への同意の確認とした。本調査の実施にあたり、山梨県立大学看護学部の研究倫理審査委員会の承認を得た。

## IV. プログラムの実施状況

### 1. 準備から実施までの概要

本プログラムの準備は、平成22年11月に応募し、平成23年4月に採択通知を受け、準備を開始した。大学総務課の科研費担当者が事務を担当した。昨年度と同様に開催日程は看護学部オープンキャンパスと同時開催とし、看護学部広報委員会に企画運営を依頼した。

#### 1) 参加者への周知方法

学振のホームページに6月上旬より応募専用のページが開設され、公募が開始した。今年度は学振のホームページからの申し込み者は3名であった。昨年度の広報活動においては高校の進路担当教員からの学生への情報提供が一番効果的であった点を踏まえ、今年度は山梨県内全校と近隣の高校の進路担当教員への案内状の送付を中心的な広報活動とし、他には本学主催の進路説明会・本学ホームページ上での案内などを行った。申し込みは、事務室へのFAX送信にて行い、学振からの指定に従い、事前申し込み制とした。

#### 2) 前日までの準備について

プログラムのちらしやポスターを作成する際には、昨年度の実施風景の写真を掲載し、高校生の興味・関心が持てるようなデザインを工夫した。また、昨年度に好評であったクッキータイムのお茶とお菓子等を準備し、本学の看護学生のボランティアも14名依頼し、当日の会場準備や運営に参加してもらった。

また、昨年度からの本プログラムの独自性として、がん患者の生の声を高校生に聞いてもらい、看護の役割について考えてもらうことを目的とし講義方法や内容の工夫をしているが、今年度は山梨県内で乳がん体験者、患者会代表として講演活動をされている方のご協力をいただき、事前打ち合わせを行い、本企画について高校生ががん治療についてイメージしやすいようにする工夫を中心に話し合った。

## 3) 実施状況

表 1. 当日のタイムスケジュール

時 間	内 容
12:20~13:30	受付
13:30~14:30	大学紹介
14:40~15:20	ひらめき☆ときめきサイエンスの紹介
15:20~15:40	がん治療について ・がんの発生メカニズム ・生活習慣とがんの関係 ・がんの検査と治療 ・今からできるがん予防 ・がん看護の役割について
	クッキータイム (在学生との交流)
15:40~16:00	当事者 (がん患者) からの体験談を聞く ・がん告知された時の気持ち ・日常生活への治療の影響、副作用
16:00~16:15	大学の施設見学 (学部学生の案内による) 見学をしながら在校生と交流 アンケート記入
16:30	修了式・記念写真撮影 終了

平成23年7月23日~24日の2日間にわたり、山梨県立大学看護学部（以下、本学とする）池田キャンパス内の講義室を会場として、プログラムを実施した。当日のタイムスケジュールは表1に示した。参加者は高校生とその保護者で、本学への進学やプログラムのテーマに興味のある高校生であった。今年度は56名（昨年度38名）の高校生の参加があった。

プログラムの実施にあたり、ボランティア学生14名の協力を得た。参加者には、受付から名札を着用していただいた。最初はオープンキャンパス参加学生と共に本学看護学部に関する説明を受け、その後はオープンキャンパスの参加者とは別れて、本プログラムへ参加した。今年度も高校生より、申し込みの段階で、「学内（施設）を見学したい」「大学生とふれあいたい」という要望があり、要望を受けて内容を工夫した。プログラムの前半は研究者からのがんに関する講義（がんの発生のメカニズム、生活習慣とがんの関係、がんの検査と治療、今からできるがん予防、がん看護の役割について）後半は乳が

ん体験者の講演とし、2部構成とした。乳がん体験者からの講演の内容は、「がん告知をされた時の気持ち」「日常生活への治療の影響」「治療の副作用について」「看護職をめざす高校生へのメッセージ」という高校生が乳がん治療についてイメージしやすい様に順序を考え、教材等を使用するなど工夫した内容で話をしていただいた。

## V. 結 果

## 1. 対象者の概要

56名の参加者は静岡県1名、山梨県55名であった。学年は、高校1年生3名、2年生14名、3年生32名であった。男性3名、女性53名であった。質問紙への参加は任意であり、有効回答数は54名であった。来学回数は、初めての者が28名、2回目が23名、3回以上は3名であった。オープンキャンパスに来たことがあるかという質問には、ありがた24名、なしが29名であった。参加者のうち、本学への入学を希望している・検討中と答えた者は51名であった。

表2. 学振からの質問紙結果

項目	質問	選択肢	2011年 n=54 人数 (%)	2010年 n=38 人数 (%)
1	今日、参加しておもしろかったですか	とてもおもしろかった	31 (58)	25 (69)
		おもしろかった	22 (42)	11 (31)
		おもしろくなかった	0	0
		わからない	0	0
2	今日のプログラムはわかりやすかったですか	とてもわかりやすかった	38 (73)	27 (73)
		わかりやすかった	14 (27)	10 (27)
		わかりにくかった	0	0
		わからない	0	0
3	科学に興味をわきましたか	非常に興味がわいた	32 (60)	23 (64)
		少し興味がわいた	20 (38)	13 (36)
		興味がわかなかった	0	0
		わからない	1 (2)	0
4	研究者的話などを聞いて、将来自分が研究者になろうと思いましたが	絶対、なろうと思った	15 (29)	1 (3)
		できれば、なろうと思った	27 (53)	14 (39)
		なろうとは思わなかった	4 (8)	7 (19)
		わからない	5 (10)	14 (39)
5	参加しようと思った理由について教えてください	内容に興味があったから	34 (64)	-
		先生や両親に薦められたから	16 (30)	-
		近所で開催されるから	0	-
		その他	3 (6)	-
6	このような企画があれば、また参加したいと思いますか	是非参加したい	29 (55)	18 (50)
		できれば参加したい	23 (43)	18 (50)
		参加したいとは思わない	0	0
		わからない	1 (2)	0
6	このような企画に参加しやすい時期はいつですか (複数回答可)	夏休み	31 (82)	34 (87)
		冬休み	1 (3)	4 (10)
		土曜日	3 (8)	0
		日曜日	3 (8)	1 (3)
7	このプログラムを誰から(どこで)知りましたか (複数回答可)	学校の先生	42 (90)	30 (85)
		家族、友達	1 (2)	0
		機関のホームページ	2 (4)	-
		日本学術振興会のホームページ	2 (4)	2 (6)
		広告・ポスターなど	0	2 (6)
		その他	0	1
8	科研費についてご存知でしたか	よく知っていた	2 (4)	1 (3)
		少し知っていた	1 (2)	1 (3)
		聞いたことはあった	6 (12)	4 (11)
		今日初めて知った	43 (82)	30 (83)

表 3. 筆者らが作成した質問紙結果

項目	質 問	選択肢	2011 年 n=54 人数 (%)	2010 年 n=38 人数 (%)
1	がんに関する話をこれまでに受けたことがありましたか	あった	9 (17)	2 (6)
		なかった	19 (35)	21 (60)
		あったが詳しく聞いたことがなかった	26 (48)	12 (34)
		その他	0	0
2	今回参加して看護師の役割について理解を深める機会になりましたか	そう思う	48 (89)	36 (97)
		ややそう思う	6 (11)	1 (3)
		あまり思わない	0	0
		思わない	0	0
3	今回参加して、以前よりも看護への関心は深まりましたか	そう思う	52 (96)	29 (78)
		ややそう思う	2 (4)	8 (22)
		あまり思わない	0	0
		思わない	0	0
4	本事業はあなたの期待した内容でしたか	期待以上だった	33 (61)	-
		期待した内容とほぼ合っていた	20 (37)	-
		期待した内容ではなかった	1 (2)	-
		その他	0	-
5	本事業は満足できるものでしたか	とても満足している	38 (72)	-
		やや満足している	15 (28)	-
		やや不満足	0	-
		不満足	0	-
6	本学で学んでみたいと思う気持ちが強まりましたか	そう思う	50 (93)	35 (97)
		ややそう思う	4 (7)	1 (3)
		あまり思わない	0	0
		思わない	0	0

表 4. 自由記載質問紙結果 ( ) は回答数を示す。

参加して印象的だったこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・告知を受けた時のショックや体験者の気持ち、つらさについて (21)</li> <li>・体験者の話。前向きに明るく話してくれたこと (14)</li> <li>・乳房切除・再建に関する話。(6)</li> <li>・がんの特徴(発生数・女性のがんの特徴) (5)</li> <li>・がんが人事でないと感じられた。(3)</li> <li>・誰にでもがんになる可能性があるということ (3)</li> <li>・検診がいかに大切ということが分かった。(2)</li> <li>・ピンクリボン活動として世界に向けた活動をしていることについて (2)</li> <li>・患者の気持ちになって考えることが大切だと感じた。(2)</li> </ul>
参加してよかったこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・がんについて詳しく知ることができ、知識が深まった。(19)</li> <li>・体験者から話を聞け、がん患者の気持ちがわかった。(14)</li> <li>・普段聞けないことがたくさん知れたこと。(6)</li> <li>・がんについて聞けたし、看護についてもっときけた。(4)</li> <li>・がんについて自分とは全く関係のないことではないのだと思いました。(3)</li> <li>・がんは予防することができることを知ることができてよかった。(2)</li> <li>・もっとがんについて考えてみたいと思えた。(2)</li> <li>・看護への興味がわいた。(2)</li> <li>・パワーポイントを使ってあり、分かりやすかった。(2)</li> <li>・自分自身の他人に対する考えが変わった</li> <li>・私たちも関わることに対しての内容だった。</li> <li>・大学生のみんなが優しく教えてくれた。</li> <li>・ケーキやお茶があったこと</li> </ul>
本企画やオープンキャンパスに望むこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年同様にやってほしい (2)</li> <li>・もっと在校生と話をしたり、進路相談をする機会がほしかった</li> <li>・オープンキャンパスにも両方参加できるようにしてほしい</li> </ul>

## 2. アンケート結果

学振の質問紙調査結果を表2に、筆者らが作成した質問紙調査結果を表3と表4に示した。昨年度の結果も表中に記載した。

表2については、学振の指定の書式で、質問項目はほぼ昨年と同様であったが、今年度新たに項目5「参加しようと思った理由について」の質問が加えられた。「内容に興味があったから」と答えた学生が6割以上であり、自発的に参加したことが伺えた。本学のホームページを見たことがあるかという質問で、あると答えた者は、46名(87%)であった。ほかの項目についてはほぼ昨年と同様の回答傾向であったが、項目4「将来自分が研究者になろうと思いましたが」の質問については、昨年度は「わからない」と答えた割合が高かったが、今年度は「絶対、なろうと思った」と「できれば、なろうと思った」と答えた割合が合計82%であり、昨年度は42%であり、増加傾向がみられた。

表3については、筆者らが作成した質問項目であり、項目4「本事業はあなたの期待した内容でしたか」と項目5「本事業は満足できるものでしたか」という質問を今年度新たに追加した。項目4については、「期待した内容」または「期待以上」とほぼ全員が答えていた。項目5については、「とても満足」「やや満足」と全員が答えていた。

上記以外の項目はほぼ昨年と同様の結果であったが、項目2「参加して看護への関心は深まりましたか」という質問では、「そう思う」と答えた割合が昨年78%であったが今年度は96%へ増加していた。

表4の自由回答の結果では、「参加して印象的だったこと」の質問では、ほとんどの参加者ががん体験者からの話についての回答であった。「参加してよかったこと」は、がんに関する講義や普段体験できないことを体験できたこと、大学生との交流等の回答がみられた。次年度以降への希望や課題については、継続を望む声や本企画とオープンキャンパスの両方に参加できるような時間設定についての要望があった。

## VI. 考察

今年度は、実施内容への期待や満足度について直接的に質問し、回答を得たところ、期待通りまたはそれ以上という回答が得られ、満足度も高かった。また、参加理由を問う質問では、自発的な参加が多かったこと、大学に関する情報入手方法は高校の教員からが大半であったことが分かった。これは、事前の広報活動において、進路担当の教員への周知等により参加を促す効果があったためと、ポスターや案内状での企画の具体的な掲載により参加対象者のニーズと一致できたためではないかと考えられた。また、参加者は、高校2、3年生が多く、すでに入学を志望・検討中であると答えていた割合が高いことから、入学を希望する大学について深く知りたいという興味から参加していることが伺えた。

2部構成のプログラムで、前半のがん講義については新しい資料を追加したが、全体的には昨年度とほぼ同様の内容(がん発生のメカニズムやがん治療について、がん看護の役割について)で実施した。後半のがん体験者からの講演は、昨年度は対談形式であったが、今年度は体験者からの講演形式で視聴覚教材や乳房モデルなど乳がんの特化した内容で専門的・具体的な内容であった。男子学生も参加していたが、乳がんは女性に多い特徴はあるが男性患者もいるということから、性別に関係なく参加できたと考えられた。

企画の後半は昨年度と変更したが、自由回答の結果からもわかるように「がんは身近な病気である」「がんへの関心が深まった」「がんは予防できる」「自分自身の考えが変わった」などの感想から、がん体験者である当事者が参加したことで、がんを身近な病気だと感じ、がん治療や看護への理解を深めることができ、高校生自身の健康や看護への関心がさらに高まり、広報活動の工夫から参加者も増え、より充実した企画となったことが結果から示された。

文部省「高等学校学習指導要領」<sup>3)</sup>において、保健体育の目標・内容において「健康の考え方」

「健康の保持増進と疾病予防」「生涯を通じる健康」「社会生活と健康」という項目が設定されている。自己の健康に関する研究<sup>4)</sup> <sup>5)</sup>は、年々低年齢化している生活習慣病や早期喫煙の問題などもあり、近年研究がさかんである。今回の企画である「がん治療について一緒に学ぼう！」は、表1と表4に示したように、がんの疫学(発生のメカニズムや生活習慣との関連、予防)・がん看護、乳がん体験者の発見・告知・治療・その後の生活に関する内容を学習することで、これらの高校生が学ぶべき項目の学習を深め、また参加者自身の健康管理につながるものであったと考えられる。

現在がんは「早期発見・治療する」時代から「予防」の時代へと変化しつつある。高校生においても子宮頸がんのワクチン接種や乳がんのセルフチェック、がんを予防するための生活習慣の見直しなど知識があれば自身でがん対策を行うことも可能である。本企画への参加を通して、これらの知識を得て、自己の健康管理につなげることができると思う。

今後も科研費等の研究成果を踏まえ、高校生など将来の看護を目指す学生を対象に、研究に興味・関心をもってもらえるような企画を実施していきたいと考える。

## VII. 今後への課題

がん体験である当事者参加型の学習や満足度への影響が大きいことが考えられるため、今後も継続して当事者参加型の講義や体験学習、また大学生と交流できるような工夫したプログラムが求められると考える。継続してこのようなプログラムを実施していくことで、入学を希望する学生や一般に対する大学の研究活動や看護への理解をより深めることに役立つものと考えられる。

## 謝 辞

本プログラムの実施に際して、快く参加を承諾して下さった山梨まんまくらぶ代表若尾直子様に深く感謝申し上げます。また、ボランテ

ィアで手伝ってくれた本学の学部学生の皆さま、広報活動・運営に携わって下さった広報委員をはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) ひらめき☆ときめきサイエンス：独立行政法人 日本学術振興会 HP, 2011.11.11, <http://www.jsps.go.jp/hirameki/>
- 2) 高岸弘美 ほか: 高校生を対象とした当事者参加型体験プログラムの効果に関する研究～ひらめき☆ときめきサイエンス ようこそ大学の研究室へ～を実施して, 山梨県立大学看護学部紀要, 第13巻第1号, 61-68, 2011.
- 3) 「高等学校学習指導要領」平成21年3月9日: 文部科学省告示第34号
- 4) 横山公通ほか: 中学生の自覚症状と生活習慣に関する研究, 第53巻 日本公衆衛生学会誌 第7号, 471-478, 2006.
- 5) 大塚敏子ほか: 高校生の将来喫煙のリスクからみた特徴の分析, 第57巻 日本公衆衛生学会誌 第5号, 366-379.

# A Study on the Effect of an Experience-based Program, “Let's study the cancer treatment together” to High School Students

TAKAGISHI Hiromi, MURAMATSU Terumi, MONJU Kikuno,  
NATORI Hatsumi, MOTEGI Akemi, OBI Eiko,  
YAMAKITA Mitsuya, TATEISHI Yuka

key words: Hirameki☆Tokimeki Science, cancer nursing